

や やるぞ～ ま まけないぞ～ が がんばろうぜ～ た 楽しい学校になるように

こうべ

## そして頭を垂らす謝罪の王様！

知床沖の海難事故は、何ともやりきれない出来事だ。当事者でない自分がその心中を察するのは不可能なほど、親族や関係者等の無念させつなさは如何ばかりだろうか。その悲しみは底なしの深海の如く計り知れない。

そして、連日、運航会社の社長の会見や評判がワイドショーを賑わせている。多数の命が奪われ、取り返しのない事態が起きてしまった。マスコミは容赦ない。会見の場でも問答無用の質問が乱れ飛ぶ。最終的には、あの社長に「全ての責任は自分自身にある」と言わせ、さらに糾弾したいのだろうと想像がつく。視聴する方も、センセーショナルな内容に食いつく。

もう一つ。ある私立高校サッカー部コーチによる暴力行為動画事件も、やるせない出来事だ。学校や監督の対応は、子どもの心情と遠く離れた形で進められていたように見え、学校の経営陣が謝罪会見も遅きに失した感がある。同じ教育関係者として、決して対岸の火事とは思えず、これら一連の出来事が起きたこと自体、胸が痛む内容だ。

運航会社の社長にも、学校の管理責任者にも、同情する気は微塵もないが、あのような謝罪の場を目の当たりすることは決して気分がいいものではない。

教員として過去も今も未熟な自分も、これまで様々な場面で何度頭を下げてきただろうか。その中でも、三十代前半の頃の忘れられない出来事がある。

自分が担任するクラスのB子が万引きをした。学校で本人に厳しく指導し家庭連絡をした。翌日、B子の父親が学校に怒鳴り込んできた。こちらの指導に納得がいかなかったのだろうかと思構えていたが、怒っていた内容はそうではなかった。

娘が万引きした事実を他の子が知っていて、自分の娘がいたく傷ついているというのだ。父親は、学校のせいで情報が漏れたのだと言う。外部に漏れることなどないように、指導は細心の注意を払っていたので、あり得ないと思っていた。が、父親の話聞き進めていくうちに、その噂の情報源が、どうやら同じクラスのC子だとわかり、情報が漏れた理由を知ることになる。

前日、授業開始時より早目に教室に入った時のことだ。教卓を囲んでクラスの子と雑談しながら時間を過ごし、授業開始のチャイムがなるまでわずかな時間があったので、ちょっと用をたしにトイレに向かった。その時に、教科書やチョークなどの授業用具と合わせて、日々の授業記録などを記入する指導簿もそこに置き去りにされたままだった。自分が席を離れたわずかな隙に、雑談の相手の一人だったクラス一おしゃべり好きなC子が、自分の指導簿を勝手に開いて見ていたのだ。いたずら気分ノートを開いたのだろう。開いたページに、「〇月〇日、B子万引き」と確かにそこに記されていた。

わずかな時間とはいえ、そこに指導簿を置き去りにした自分の過失は認めざるを得ない。弁解の余地はない。「しまった」としか言いようがなかった。

万引きした事実をもとにした保護者への説明や指導は置き去りになり、逆にその父親からは一方的にお小言お叱りを言われ続け、私は一方的に謝り続けた。でも、でもですよ……。

『人のノートを勝手に覗き見るような不届きな行為をC子がしなければ。そして、お父さん、そもそもあなたの娘さんが万引きなんかしなかったら、こんな事態になることはなかったんですよ。それも、万引きは、今回が初めてじゃない。』そう言いたかったけど言えなかった。ただひたすら頭を下げ続けた。

謝るときは、何に謝り誰に謝るかが問題だ。確かに物事がよくない方向に進んでいけば、どこかに問題や責任があるわけだから、その原因をはっきりさせたり、解決に向けて努力することは当然重要だ。だが、問題の本質が置き去りにされ、他の人間のあら探しや悪意をもってとことん関係者を追い詰める現代の風潮には、やや辟易する場合もある。

また、自分も悪いけど相手の方がもっと悪い。だから謝らない。これは自分の担当ではない。だから謝らない。謝れば自分の非を公に認めることになる。だから謝らない。特に訴訟なんかからんでくると、謝罪すること自体、自分の非を認めることになる。それが世の常というものだろう。

もちろん、取り返しがつかないことについては別次元だ。学校で言えば、生徒の命が失われることになったり、いじめの重大事態などあってはならないし、どんなに謝っても済む問題ではない場合だって当然ある。

しかし、生徒だって、我々教師だって、親だってミスや過ちを犯すことはある。特に子どもに何か問題があると、いや学校が悪いんだ、先生が悪いんだ、家庭が悪いんだ、地域が悪いんだ、国が悪いんだ、世の中が悪いんだなんてことになる。そして当事者でない人間が声高に叫ぶ場合もある。

毎々子ども不在で議論が進み、自分のことは皆棚に上げて責任の所在を自分以外のところに求めることばかりに躍起になってしまう。学校だって、家庭だって、地域だって、国だって完璧じゃないのに。

若い頃、大好きだったベテランの先生がいた。特に、授業がうまいわけではない。部活動指導に熱心というわけでもない。一見、のほほんとして何も考えていない、つかみどころのない前川清のような先生だった。でも、どんな先生にも反抗・反発するいわゆる問題児たちが、その先生の前では実に素直でいい子になった。その中の生徒の一人に、ある日その理由を尋ねてみた。

「これまで親からも他の先生からも、全部自分が100%悪者扱いされ続けてきた。でも、あの先生は、100のうち1でも2でも自分に非があると思うと、自分のようなダメな人間にも、本当にすまなそうにすぐ頭を下げしてくれる。」

納得の回答だった。私も同感だった。同僚として同じ場面が何度もあった。

取り返しがつかない過ちやミスならば、同じことがないようにするにはどうすればいいか、それをまず最優先に考えるべきだ。その過程での我々の言動の中心に、一番大切にすべき子どもの存在を、片時も忘れることなしに。